



Title	「反抗者」の肖像：表象のメカニズムの理論的スケッチ
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2006, 2005, p. 31-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77321
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「反抗者」の肖像

——表象のメカニズムの理論的スケッチ——

伊 勢 芳 夫

1. 「表象されたアイデンティティ」と「真のアイデンティティ」

徳川幕府になり、1613 年日本全国にキリスト教禁止令が出され宣教師や信者が激しく迫害される状況下で、伴天連と呼ばれる宣教師たちが日本人の中に潜伏するようになったとき、日本人を装う宣教師と「本当の日本人」の差別化が日本の権力者、そして日本の歴史において初めて政治的な問題になったのである。もちろん、それ以前において、「日本人」と「非日本人」との意識がなかったといっているのではない。身体的特徴や、言語、習俗の違いによって、彼我(them/us)の意識があったことは間違いないであろう。ここでいう政治的な問題になったということは、たとえ「非日本人」が鉄砲や刀といった武器をもって襲ってこなくても、日本の社会に存在するだけで「脅威」になりうるという意識を明確にもち始めたということである。この「異質なものに対する脅威」の意識は、すべての社会に自然に存在するものではない。少なくとも、17 世紀のムガル帝国にはなかった。そしてその意識の欠落、あるいは未発達を見抜いたのは、フランス人の François Dupleix であり、イギリス人の Robert Clive であった。彼らは、少数の軍隊で、圧倒的多数のインド人を支配できることを知ったのである。一方、豊臣、及び徳川の支配下の日本においては、その意識があった。それは精神の硬直さからというよりは、彼らにはおそらく現在想像する以上に国際的視野に立った政治的判断力があったのであろう。

このような「日本人」と「非日本人」という政治的な意識は、開国後の明治期に、そしてそれ以降ずっと、より先鋭化された形で、より鬱屈した形で日本人の心に根をおろしている。三宅雪嶺が『真善美日本人』を書く動機は、彼自身の欧米列強に対する深刻な劣等意識であったことは明白であろう。この明治期の日本人が感じた劣等感や脅威は、17 世紀の日本人が感じた脅威とは必ずしも同じではない。江戸時代の日本の権力者は、外国人を日本の中に入れなければ、太平楽でいられたのである。それに対して、明治期の日本はそうではなかった。いや、それだけではなかった。欧米列強の言説が世界を席卷する時代状況にあって、日本は表象され、地政学的・人種的位置を定められてしまうのである。そしてそれが世界中に流通するだけでなく、日本の中にも侵入してくる。それによって、「本当の日本人」と「表象としての日本人」は転倒されてしまうのだ、別のいい方をすれば、「本当の日本人」を決め

るのが日本人ではない状況が生まれてくるのである。したがって、新渡戸稲造の努力は、そういう意味で理解可能な、ポストコロニアル状況における旧植民地の知識人に繋がる必死の努力であったのである。そしてそれは、第1次世界大戦を経て、世界の強国の一つにのし上がった後でも消えることはなく、昭和になって日米戦争に進ませる内的要因の一つとなったといえよう。

この西欧列強の言説における「表象としての日本人」とそれへの対抗として日本の知識人の提出した「真実の日本人」という問題は、まさにポストコロニアル状況における、それまでの植民地言説による他者としての表象化を脱構築しようとする旧植民地の知識人の苦闘と通じるものである。そして実際、西欧の欲望の投影としてのオリент・イメージについての分析は、数多の研究者によって行われている。それらの研究では、欧米列強における被植民地住民・非白人の表象における、人種主義・植民地主義イデオロギーを繰り返し繰り返し炙り出される。Edward W. Said がいうように、政治性を帯びない表象などありえない。しかしながら、政治性を帯びているのは、何も表象された被植民地社会やその住民だけではなく、それへの対抗として出された「真実のナショナル・アイデンティティ」に関してもそのことがいえるのである。

もちろん、そのことをポストコロニアルの知識人の中にも十分認識しているものは多くいるであろう。ただ現実的にも、戦術的にも、また、心情的にも、「被害者」という立場を譲れない知識人は多いのである。つまり、「ポストコロニアル批評」そのものが極めて政治的行為なのである。

一方、日本の「知識人」には、「糾弾」という特権は与えられていない。中には厚顔無恥にも「糾弾」している日本人もいないではないが、「厚顔無恥」ではない日本人に許されているのは「自虐」か、頬被りをするしかないのである。ただこの状況は、必ずしも絶望的な状況ではない。もし明治以来のコンプレックスを克服することができるのなら、表象され/表象した歴史をもつ国に生まれた人間として、よりきめ細かな分析が可能になるであろう。欧米の言説のどこを切っても、金太郎飴のように人種主義・植民地主義イデオロギーが充満しているといった、粗雑な議論から脱却できるであろう。

2. 文化コードと主体の位置

人間が認識し、表象し、伝達できるためには、コード化が必要であるという命題は、いかにも構造主義的で、人によっては生理的な反発を感じるであろう。しかしながら、「見る」、「聞く」といった根源的な行為すら、我々の視覚器官や聴覚器官に、光や音という媒体を読み解くためのコードをもっていない限りあり得ないことは事実なのである。たとえば、「見る」ということは、光の波長、強弱、方向性を感知し、それをコード体系に則って読み解くことによって、さまざまな波長をもった光の束から、眼前に広がる「風景」を作り出すことができるのである。しかしながらコードとして読み取れない場合、それは紫外線であろうと、放射線であろうと、人間にとってそれらは「無」と等しいものである。

もしそれらを「無」から意味のある存在にするためには、それらをコード化し、そしてコード体系を使って読み解くようにする必要がある。紫外線や放射線は「常に」存在しているのであるが、人類にとっては、それらがコード化されるようになって初めて「存在」したのである。これからも、「常に」存在している物質や生命が、コード化されることによって「存在」を開始することがないとはいえないのである。つまり、我々の認識圏外には何も存在しないということではなく、光であれ音であれ、何らかのメッセージを読み解くこと（decode）なしには、我々にとって認識できない、つまり、存在しないということと等価であるということなのである。

それと同様に、我々が人間、社会、文化を読み解くためには、それに先立ってコード化がなされる必要がある。なされていない場合は、それらは我々にとって「無」であるのだ。

社会という水槽に、コードが沈殿し、それらは複雑に絡み合い、さまざまな結晶を生み出していく。その結晶は、文学作品であり、法体系であったりするのだ。たとえば、傑作といわれる文学作品の中に描かれている人間は、いかにも人間以上に人間らしいと感ずる場合があるが、それはいわゆる生身の「人間」を洞察力をもって再現しているからというよりも、その時代・社会が生み出した「人間の意味」を明快に表現しているからである。

人間は、長い歴史の間に生成し、変化し、細分化してきた文化のコード体系をもった社会に生まれ、幼少期から、家庭や、学校、生活・政治共同体、宗教施設の中で、言語を媒体としてその文化コードを刷り込まれていく。したがって、たとえば、ヒンドゥー教の社会に生まれれば、生物としての牛に対して、「聖なるもの」というその社会がコード化した意味を読み取ることになる。もちろん同一社会といえども、内部に様々なヴァリエーションを内包しており、地域や、世代、社会階層で必ずしも同じコードが用いられるとは限らない。しかしながら、それらの内部における差異や変化は重要であるものの、さらに重要なことは、社会を構成する成員の一人一人はその文化的コード体系の複雑な網目にがんじがらめに縛られており、コードに対して疑義を感じる余地が極めて少ないということである。あたかも、それらは自明、真実のものであり、それを疑うことを、許しがたい誤り・冒瀆のように感じる精神構造が作り出されていることである。だから、たとえば、キリスト教の教義にどっぷり浸かった16世紀のイタリアにおいて、天が地の周りを回るのではなく、地が天の周りを回ると主張する人間に対しては、火炙りにするのが当然であるという感情を生じせしめるのである。

このような意味において、その社会にどっぷり浸かった人間が、その社会に張り巡らされた文化コードで自己のナショナル・アイデンティティを読み解くとき、それは「真実の」という修飾語が冠され、古来変わることのない民族の本質のようにみなすことになる。それに対して、外部から記号化され、表象化された場合は、政治的に偏向された、ステレオタイプ化されたと感ずるのである。しかしながら、「真実のナショナル・アイデンティティ」の方も、同様に政治的に偏向した、ステレオタイプ化した記号、表象に過ぎないのである。それが明確に現れるのが、戦争についての解釈であろう。同一の歴史上の戦争についても、

それを始めた民族を、外部からは「残虐非道な民族」と断罪されるものが、その当事者からは「ジハード(聖戦)に命を奉げる崇高な民族」として正当化されるのである。

ただ外部から「表象されたナショナル・アイデンティティ」と内部から生まれた「真実のナショナル・アイデンティティ」がまったく同質のものといっているわけではない。明らかに違う点があるのである。それは主体の位置である。そしてそれこそは、まさに政治的なものである。

表象の分析をするときに非常に重要なことであり、しかしながら多くの表象研究で黙殺されていることは、「主体」の位置を奪い合う陣取り合戦に働く政治力学と、表象行為そのものに働く政治力学は必ずしも同じでないということである。たとえば、植民地化によって決められた「主体」と「他者」の位置関係を表象する場合、その表象行為に働いている支配原理は、必ずしも植民地主義イデオロギーであるとは断定できないのである。

3. 宗教的・伝統的世界観と科学的世界観

欧米列強が帝国主義のもと、植民地拡張政策を推し進めていった 18 世紀から 20 世紀初頭にかけての時期は、同時に近代科学の発展の時期と重なっている。それは強力な近代兵器の開発によって軍事力の圧倒的な優位をヨーロッパに齎しただけではなく、植民地政策にそれまでとはかなり違った性格を帯びさせたといえるのである。

「科学」というのは、認識の方法のことである。観察し、分析し、類別し、そして体系化する認識のプロセスのことである。しかしながら、本論においては、すでに述べてきたように、「認識」というのは「コード化」に他ならないと考える。例えば、物質界を考えると、物質は分子の様々な組み合わせや配列として decode され、分子は様々な原子の組み合わせや配列として decode され、さらに原子も陽子や電子や中性子などの素粒子の組み合わせや配列として decode されるのであるが、decode できなくなった状態で、不可知の領域に入ってしまうのである。もちろん仮説を打ち立てることは可能であろう。しかしながら、その仮説というのは、仮のコードを想定しているだけなのである。宇宙に目を向けても同様である。decode できない領域に至ると、そこからは不可知の世界になるのである。また、「心」の科学も同様である。このような意味において、「科学」の発展とは、認識世界を拡大していくということの意味するが、それは取りも直さず、観察・分析・類推・類別という科学の方法論において、試行錯誤を繰り返し、絶えずコードの改訂を行うことによって、コードの細分化が進行していくことに他ならない。

すでに述べたように、我々は細分化され、張り巡らされたコード体系の中に生きていて、そのコード自体に対して疑義を感じることは極めて困難である。もっともそれは必ずしも不自由で、苦痛に満ちた牢獄のような世界に生きているということではない。むしろ磐石な世界に生きている充実感すら感じるのである。日常生活において、死後の世界において、自分が読み解く意味が「真実」であり、目に見えるもの、耳に聞こえるもの、手に触れるものはすべて「真実の実態」であり、死後の世界は厳然と存在し、徳は報われ、悪は懲せられる。

また、行動規範も文化コードが提供してくれるので、迷うことはない。男は男らしく、女は女らしく、大人は大人らしく、子供は子供らしく生きれば良いのである。むしろ、コードに対する信頼感が薄れたとき、存在の不安を感じるようになるのである。

そのように確立され、権威をもつ文化コードはその社会の構成員に確固たる世界観、価値観を提供するのである。まして、直感的・習慣的に作られてきた文化コードに対して、極めて厳密な方法論によって生み出されてきた「科学」というコード体系が社会に浸透するにつれて、より「真なるもの」と感じるようになるのは自然なことであろう。実際、19世紀、及び20世紀においては、そのような科学の体系化がそれまで宗教の提供してきた世界観、価値観を揺るがし、駆逐した時代なのである。世界の創造と成り立ち、人間の誕生と進化に関して、科学は宗教に対して異議申し立てをし、ついには勝利を勝ち取るのである。少なくとも、西洋諸国、及びそれらに追従する国々や人々においては。

しかしながら、科学的認識の過程においては、特に初期の段階においては、非常に粗雑で、乱暴なコード化が行われ、それがたとえば白人優位のイデオロギーの充満した人種学を生み出したのであった。もっとも、科学的に人種を分析し、分類するのは、それまでの博物学や生物学の発展の流れを考えれば、至極当然な学問の発生のように思われる。そして21世紀になり、今日ますます人類学、遺伝子学、生物学等の研究分野で人類の誕生や進化の系譜の研究が盛んに行われているのである。しかしながら、19世紀中葉のヨーロッパで行われたヒトの研究は、グロテスクなほどの歪な考えを生み出した。しかしこれにしても、悪名高い人種学者の Robert Knox が主張するように、それ以前の支配的な文化コード体系、つまり『聖書』が提供する人類創造の教義に対抗し、それにとって代わる科学的認識を発展させようという意図で（似非）科学者たちは研究を展開したのであった。ヨーロッパにおいて、コペルニクスから始まる多くの「異端者」、あるいは「異端的」科学者たちは、『聖書』を核としてキリスト教社会が築き上げていった「真実なる世界」に挑戦し、それを書き換えようとしたのであった。その過程で、彼らは「真（聖）なるもの」に反抗する冒涇者として、迫害され、断罪されるのであるが、徐々に科学が作り上げるコードとキリスト教のコードの入れ替えが進行し、ヨーロッパ社会において、科学的なコードが優勢になると、科学による認識のほう「真なるもの」とみなされるようになる。すなわち、新旧のコード体系の主客が逆転したのである。

このヨーロッパで起こった、宗教によって築かれたコード体系が科学によって生み出されたコード体系によって取って替えられるというのは、しかしながら、「主体」の移動がほとんど問題にならない。少なくとも、同じ階層に所属する人々にとっては、主流になるか、あるいは異端として反抗者になるかどうかは、優勢なコード体系に従順かそうでないかであって、コード自体が人を選別するのではないからだ。しかしながら一方、ある社会に別の強力な「外部者」が侵入し、「主体」の位置を剥奪したとき、その「外部者＝主体者」が新たなコード体系を作り出し、それを自らのコードとするのみならず、そのコードを被支配者に押し付けてくる場合——その典型的な例は、植民地化されるということであるが——には、

支配のイデオロギー(植民地主義イデオロギー)がコード形成に介入し、支配・被支配を正当化し、当然のこととするようなコード体系が築かれていくのである

そのことを、もう少し具体的に説明しよう。

4. 英領インドにおけるインド人の表象

植民地化において支配のイデオロギー(植民地主義イデオロギー)がコード形成に介入する過程を記述するためには、まず、ヨーロッパ人——特にイギリス人——のインド・インド人を表象するメカニズムを考察する必要があるであろう。James Mill や、T. B. Macaulay をはじめ数多のイギリス人によるインド・インド人の表象が、ファーストフード店のマニュアル化した対応のような単純な反復であるとはとても思えないからだ。

17世紀の初頭から、イギリス、オランダ、フランスがインドに商業の拠点を置き、アジア貿易を始めたとき、すでにインドには、当然のことながら、長い歴史の間に築き上げられたインド人のコード体系が存在していた。当時のヨーロッパ人にとって、その文化コードはほとんど理解のできない、つまり decode のできない体系であったことは間違いないであろう。もちろん、サンスクリット語やアラビア語の解読を通して、おぼろげな姿は見えていただろうし、その後のインド侵略の歴史を通して、所謂オリエンタリストの研究によって、仏教遺跡を発掘するなど、インド人以上にインドの歴史を decode できるまで、インドのコード体系の理解が進むのである。したがって、Rudyard Kipling の小説『キム』のラマ僧が、ラホール博物館の館長の仏教に関する博識ぶりに驚嘆する描写は、必ずしも作者の白人としての矜持を示しているだけとはいえないであろう。もっとも、イギリス人のオリエンタリストがインドの伝統的なコード体系を理解しようとする際、それらを他者化し、周縁化しようとすることには変わりなく、一方、彼らのコアとなる部分、つまり、イギリス社会のコード体系に介入させることを避けようとするのである。そのことは、イギリス人の血にインド人や他のアジア・アフリカ人の血が混じることを生理的に嫌うことと共通している。さらに、分析・分類という科学的認識方法で教育を受けたオリエンタリストは、インドの伝統的コード体系をまず、解体し、細分化し、彼らの解釈を付加しながら再構築していく。したがって、シバ神の像も、ブッダの像も、サリーも同じように、「インド」を表す換喩として博物館に陳列されるのである。「聖なる」とか、「美しい」とかいった、インドの伝統的コード体系においてコード化されている意味合いは剥ぎ取られ、その代わりに「インド的」とか、「エキゾチック」といった意味合いが新たにコード化されるのである。これは単に、近代人だからというだけではなく、他者の文化コードの優位者による改訂だからである。

このようなオリエンタリスト的「インド・インド人」の再構築、伝統的コードの書き換えにおいては、文化コードがもっているその文化社会の構成員に対する絶対的な権威が消失するという意味で、もともとの文化コードとは似て非なるものに変質させられる。それは取りも直さず、文化固有の「主体者(当事者)」の排除なのである。確かにそういう意味において、インド(オリエント)研究が、「真のインド(オリエント)」研究ではなく、「西洋のインド

（オリエント）」研究である。しかしながら、インド人による研究が真のインド研究かといえば、それは「真のインド」研究であり、何人といえども、括弧を取り去ることはできない。

その両者の違いは、すでに述べたように、「主体者」が存在するか、しないかということである。したがって、「西洋のインド」研究と「真のインド」研究の間には、永遠に埋められない溝が存在するのである。ただ、オリエンタリストが「主体者」の不在を意識するとき、つまりコード化するとき——それはまったく皆無とはいえない——には、その溝が限りなく狭まることも否定できない。

次に、分析・類別という科学的認識方法によって、未知の領域を読み解くという方法である。上記のオリエンタリストとの決定的な違いは、すでにそこに存在する伝統的文化コードを無視し、ヨーロッパの文化コード、あるいはその類型・修正によって読み解こうとする点にあるだろう。したがって、最初からインド・インド人を客体・他者として、コード化していくのである。

もっとも、このような科学的な認識方法を、認識対象の「主体性」を排除するという理由だけで非難することは、科学的認識が現代の我々の認識の中心を占めているだけに、極めて非現実である。太古の人々のように、森羅万象すべてに靈魂が宿っているなどという擬人的世界観は、もはや復権できないまでに歴史の地中に埋もれてしまっている。問題は、認識対象の「主体性」を排除するところにあるのではなく、観察者・研究者のほうの「主体性」を前面に押し出しすぎるときに生じる弊害を如何に抑制するかである。つまり、対象から発せられたメッセージを、観察者の主観において歪曲したり、新たな何かを付け加えているにもかかわらず、そのようにして decode された意味がさながらオリジナルのメッセージから読み取られたように捉えることによって、対象自体が歪曲、あるいは変質させられて認識されるのである。

すでに述べたように、ヨーロッパで 19 世紀に流行した人種学や骨相学は、身体的特徴を個人や人種の本質的な能力、進化の度合いにまで敷衍することによって、今日からみればグロテスクなまでに歪な個人や人種の類型化を行ったのであった。その最たるものは、白人、特にサクソン系はもっとも進化した人種であり、一方、黒人は類人猿に近い存在であると類型化することであった。その際、研究者は、白人の身体的特徴が常に優れたものであり、黒人の特質が常に劣ったものであるという、低レベルの人種的偏見を分析や類型化のプロセスに投影したのである。

帝国主義イデオロギーや、植民地主義イデオロギーは、まさにこの種の「(似非)科学」を自らの正当性のために利用したのである。そして科学的認識を信奉する人々は、その人種観を信じ、進んでアジア・アフリカ人の啓蒙、あるいは隷属化に荷担したのであった。また、権力者も大いにそれを活用したのであった。そういう意味において、まさに「科学」は帝国主義、植民地主義の共犯者になったのである。

しかしながら、絶えざるコードの改訂作業によって、既存の認識を修正し、緻密化するのが科学的認識のもつ特性であるので、やがては植民地イデオロギーからの離反が生じた

こともまた事実である。それは、ヨーロッパ内において、神話的世界観を科学が突き崩していったようにである。

これまでみてきたことをまとめると、イギリスがインドにおいて政治的実権を握る——つまりインド人の主体性を剥奪する——以前から始まって、インドの植民地の期間を通して、二通りの認識方法によってインド・インド人が認識され、表象されてきたのである。一方が、オリエンタリストによるもので、他方は科学的分析によるものである。前者は、伝統的なコード体系を読み解き、読み直すことによって「インド・インド人」を再構築し、後者は、インド・インド人を分析(解体)し、類型化することによって記号の体系へと作り上げていったのである。そして両者とも、そのプロセスにおいて植民地主義イデオロギーが介入し、それを正当化する共犯者として使われたのであった。しかしながら、両者ともそのコード化のプロセスを通して、そのコードが細分化されていき、より精緻化されることによって、一方は、伝統的コード体系を生み出した「当事者＝主体者」の存在を浮かび上がらせ、他方は、支配者側の優位性を突き崩し、支配者と被支配者の関係を相対化するという潜在力をもっているのである。

そのような意味において、イギリス人のインド・インド人認識・表象は、植民地主義イデオロギーの共犯者でもある一方、植民地主義イデオロギーから離反し、それへの「反抗者」を生み出したとまではいえなくとも、「反抗者」を生み出す土壌を作ったことは否定できないであろう。

5. 表象の中の「反抗者」

イギリス人によるインド・インド人認識・表象が、あるいは、イギリス人が築き上げたコード体系をインド人に押し付け、教育したということが、イギリス人による植民地政策を強化したのと同時に、それからの反抗者を生み出す土壌を作り出したという主張は、一部の人々から生理的な反発を受けるであろう。しかしながら、すでに触れたように、イギリスが比較的たやすくインドを勢力下に置くことができたのは、江戸時代の日本が「西洋・西洋人」に脅威を抱くようになったのとは対照的に、あまりにも無警戒であったからであろう。もちろん軍事力の差が大きく影響したことは間違いないが、実際には、その差は決定的な要因ではないであろう。Joseph Conrad の『闇の奥』のクルツがコンゴ川流域の黒人に対して感じた神のような優位性をイギリス人が常にもっていたわけではない。特に、当時中国と並んで大国であったインドにおいては、旧式ではあったも、彼らは銃をもっていたし、何よりも、イギリス兵とは桁違いに多くのインド人兵士がいたのである。にもかかわらず、イギリスはインドを支配下に置くことができたのである。そもそも、インドの実権を握る前から、イギリスの侵略戦争には、ほとんどの場合インド人の兵士がイギリス軍に雇われていたのであった。つまり、イギリスがインドを植民地化するときには、ムガル帝国というものが存在していたにもかかわらず、その領土全土に及ぶコード体系が築かれていなかったということが推測されるのである。そうであるとすれば、具体的に何かが奪われる状況に

ならない限り、イギリスやフランスに対する警戒心も敵対心も生まれることはなかったであろう。そのような意味において、百年以上に及ぶイギリス支配の間に、インド人がイギリス人によって「インド・インド人表象」を押し付けられたことは、彼らが共通して反抗し、打ち破る対象を与えられたということになる。もちろん、これは極めてアイロニカルな「表象」の機能である。

しかしながら、一方では、イギリス人による「インド・インド人表象」が積極的に「反抗者」を生み出す役割を果たしたと考えられなくもないのである。つまり、イギリス人の押し付けたコード体系の中に支配者であるイギリス人に対する従属や劣等意識をインド人に植え付けるだけではなく、反抗心をも芽生えさせるものを含んでいたと考えられるのである。ただ、この事を示すためには、具体的にテキストの分析をする必要があるが、紙数の制限で本論の中では扱えないので、きわめて示唆的な2作品について簡単に触れておく。¹

一つ目は Edmund Candler の *Siri Ram—Revolutionist* (1912) という作品で、インド人の大学生 Siri Ram はイギリス人の教師から John Keats の詩などの英文学を教授されているのであるが、彼は Gandeshwar College での勉強に不満を感じているところに、名の知れたヒンドゥー教の宗教指導者(the Swami)であり、インド人の青年に民族主義を鼓舞する扇動家としてイギリス人から警戒されている人物の講演を聞き、啓発されるのである。そして彼自身、数人の学生仲間とイギリスのインド統治に反対する演説をするのであるが、そのことがもとで Siri Ram は大学を追われることになる。その後 Siri Ram は、宗教指導者や彼の仲間から感化(洗脳?)され、民族主義者・革命家へと変貌していくのであるが、彼の仲間から、別のインド人が出版した扇動的な文章を彼自身のものということにして当局に逮捕され、革命家として有名になることを勧められる。それで Siri Ram は2年間の懲役刑に服することになるのである。釈放後、Siri Ram は、またもや仲間から、彼に2年間の懲役刑を宣告したイギリス人の地区行政長官を暗殺すればそれを契機にインド全土で革命が起こると説得(唆)される。Siri Ram は暗殺は成功したものの、彼は逮捕され、死刑を宣告されるが、期待していた革命は起こらず、失意のもと刑務所で服毒自殺を遂げるのである。

この小説では、イギリス人教師によるインド人学生に向けての英文学の講義が、インド人学生の視点から描かれている。その際、非常に注目すべきことは、教師から英詩を読み解くことを課せられるのであるが、しかしながら、その詩が表象するイギリスの田園風景、植物や小鳥、そしてそれらに含意される意味をインド人の学生はイギリス人(主体者)のように decode することができない。さながら、イギリス人のオリエンタリストがインドの芸術や宗教を形骸化したものとして読み解くように、彼らは英詩がイギリス人に読み解かれるように読み解くことができないのである。だからといって、イギリス人のオリエンタリストと英文学を強制されているインド人学生が同じ境遇であるといっているのではない。

¹ . アプローチの仕方は本論とは多少異なるが、インドを舞台にした小説作品における表象原理を分析した、『キプリング大英帝国の肖像』(橋本楨矩/桑野佳明編著、彩流社、2005年)に掲載している拙論「アングリシストとオリエンタリストの系譜——W.D.アーノルドからサル

前者が、主体者＝優位者として、インドの文化コードを自らの言説に取り込むのに対して、主体を奪われた者＝従属者は、むしろその支配者のコードを受け入れようとする行為によって、自己の「主体」の不在を痛切に認識させられるのである。

T. B. Macaulay に代表される「啓蒙家」たちは、劣ったインド人をイギリス人の地位に引き上げるためにイギリスの歴史や文学を教えようとした。しかしインド人にとっては、イギリス人が自らの属する社会に浸透したコード体系の中で居心地よく感じるのに対して、主体を奪われた人間として、イギリス人のコード体系はまさに牢獄としか感じられないのである。

二つ目は、Paul Scott の *The Jewel in the Crown* (1966) という作品で、これは Scott のインド独立前夜を扱った長編小説 4 部作の一つである。もっともこの 4 部作はインド独立後に出版されたものであるが、Scott 自身の英領インドでの体験や、イギリスがインドで築き上げたコード体系のイギリス人自身への影響をみる上で、興味深い作品である。この小説のインド人の登場人物は、裕福な父親をもち、イギリスに移住し、イギリス人のように育つのであるが、突然父親が破産し、睡眠薬によって自殺したためにインドにいる親戚の元に引き取られるインド人青年 Hari Kumar である。彼はイギリスの文化コードを刷り込まれ、自己のアイデンティティをイギリス人のそれだと信じており、したがって、インド人のコミュニティにどうしても溶け込めない。さらに Kumar を打ちのめすのが、仲間と思っていたインドのイギリス人たちから、非常に冷淡に、他のインド人に向けるのと同じ視線を向けられることであった。彼はそのような状況に激しい不満を感じ、反抗的な態度をとっていく。ただ、一人のイギリス人女性 Daphne Manners だけは彼に好意を寄せるのである。ところが、彼女が数人のインド人に強姦されたとき、Kumar はイギリス人の警官によって、その主犯に仕立てあげられ、逮捕・投獄されてしまうのである。実はそのイギリス人の警官自身、Daphne に恋心を抱いていたのであった。

この作品の注目すべきところは、人種的にインド人であっても、イギリス社会に育ち、そのコード体系を受け入れた人間は、イギリス人のナショナル・アイデンティティが形成されるというように人物造形がされていることである。しかしそのようなアイデンティティを形成したとしても、インドという支配構造の中におかれれば、否応なしに「主体」を奪われ、他者として扱われるのだ。つまり、主体者であるかどうかはその人間の本質にかかわるのではなく、きわめて政治的に決定されるということを示しているのである。この小説では、本人の意思に関係なく、その人間のおかれた状況で「反抗者」にされることが、その政治状況が表象されているのである。

6. おわりに

1947 年 8 月 15 日にインドはイギリスから独立し、その瞬間から、インド人は主体者として「真のインド人」の構築に着手したのであった。そして植民地時代に作られたイギリ

マン・ラシュディまで」を参照して頂きたい。

ス人のインド・インド人表象を、インド人によるインド・インド人の表象の障害として、是非とも乗り越えなければならないものであると、特に独立直後は考えられたのであった。

もちろん、インド人による「真実のインド・インド人」表象を否定しようとしているのではない。しかしながら、その「真のインド・インド人」表象を絶対的な真理とみなすとき、これは何もインド人だけの問題ではなく、すべての社会や国家についてもいえることであるが、その表象の製作者＝主体者は、その築き上げた表象を内部者はもちろんのこと、周辺に対しても「真である」と認めさせないではいられない。しかし、さまざまな社会、文化コードが並存する世界にあって、「主体」をもった他者の視線を拒まないことも異文化理解にとっては重要なのである。さもないければ、他の文化コードを否定したり、取って代わろうとするであろう。実際、現在、きわめて軍事的優位にある国が、自己の文化コードで全世界の他の文化コードを凌駕し、それらにとって替えようとしているのである。「グローバルゼーション」という名の下に。